


お産について

以前に、四変部会では「四変（第四胃変位）」の名を冠しているものの、周産期疾病全般を扱うという活動方針を誌上お伝えしました。周産期疾病とは具体的に言えば、「分娩を期に発生する病気全般」のことであり、乳熱やケトーシス、胎盤停滞や第四胃変位などがあります。つまり、皆さんも関心の高いこれらの疾病はすべてお産することでおきる病気であり、いかにお産を乗り越えるかがその後の産乳成績に大きく影響します。今回は「分娩」をテーマにしてみようと思います。

さて、実際のお産の現場で酪農家が一番悩むのが「いつ獣医さんと呼ばばいいのか」ということではないでしょうか。なかなか産まれないから急患で診療を頼んだら「もう少し早く呼

んでもらえれば・・・」と言われてしまったり、「まだ産み始めていないからもう少し様子見て下さい」と言われた経験のある方も多いと思います。分娩の異常を知るためにはまずは正常な分娩経過を知る必要があります。

・分娩の前兆：乳房が張ってくる、陰部が腫れて赤みを帯びる、頸管粘液が溶けて発情期のような透明な粘液が垂れる、尻が落ちる、体温が低下する、など。この中でとくに、尾と骨盤をつなぐ靭帯が緩むことで尾が盛り上がり尻が落ちた様に見える兆候（）は信頼のできる兆候であり、この様子が確認されたら一日以内に分娩する確率がとても高いです。



(図)

・分娩第一期（開口期）：陣痛が始まり、子宮頸管が開き始め、胎児が産道内に入ってくる期間です。牛で3〜6時間とさられています。牛で3〜6時間とさ弱いため、正確な開始時期はわかりにくいです。陣痛は弱く間隔も長いです（15分程度）。食欲が無くなり、頻繁に寝起きをしたり、不安そうにウロウロするなど、挙動が変化します。

・分娩第二期（産出期）：強い陣痛により胎児が産道内に進入し、破水につづいて胎子が娩出されるまでの期間です。長い場合には3時間続きます。経産牛に比べ初産牛の方が長く、胎子が逆子の方が長くなります。

産出期陣痛開始後胎児娩出までの時間は、平均で4時間以内、8～10時間までは胎子生存の可能性があります。陣痛は3～5分間隔から1. 5～2. 5分間隔になり、しだいに強くなります。そして、尿膜囊とよばれる膜が破裂し（一次破水）、茶褐色で水っぽい液体が大量に流出します。続いて、胎子を包む羊膜が乳白色の風船のように陰部から見えるようになります。これを足胞と呼びます。ほとんどの場合分娩の途中で自然に破

裂します（二次破水）。羊水はドロっとした液体で、胎子が産道を進みやすくします。胎子の頭が産道外に出るまでが母牛の一番つらい時であり、頭が出てしまえば比較的楽に分娩が進むことが多いようです。

・分娩第三期（後産期）：胎子が娩出されてから胎盤が排出されるまでの期間です。分娩後12時間までに後産が排出されない場合は胎盤停滞と呼ばれます。

以上のような正常分娩の経過をふまえて、いつまで牛に任せて待たせていても良いのか、どのタイミングで異常を判断して獣医さんと呼ぶのか、次にあげる5つの項目を基準として正常産と異常産を判断して下さい。

1. 開口期陣痛開始後6時間経っても産出期陣痛が始まらない。↓陣痛微弱や子宮捻転の可能性

2. 産出期陣痛開始後2～3時間経ってもお産が進まない↓胎子過大、胎子失位、陣痛微弱、胎子奇形の可能性

3. 足胞が見えてから2時間経っても胎子が娩出されない↓胎子過大、胎子失位、陣痛微弱、胎子奇形の可能性

4. 一次破水後3～4時間経っても胎子が娩出されない。

5. 一次破水後1時間たっても足胞が見えてこない。

牛にとっては自然分娩が一番だとは思いますが、近年の遺伝改良により初産牛でも過大子を産むことが多くなっています。分娩が長引くと胎子が子宮内で

低酸素血症状態になり、仮死状態で生まれ、生存したとしても下痢や肺炎を起こしやすくなります。適切な分娩管理と助産によつて、母牛にも子牛にも安全なお産を心がけてください。

（音別白糠診療課 鮎川 悠）